岡先生の思い出

金山 弥平

岡道男先生のことを思うとき、まっさきに目の前に浮かんできますのは、附属図書館北西隅のかつての西門を通り、鞆をお持ちの方の手も振られる独特の歩き方で、大股にゆったりと文学部に向かって歩いてゆかれる先生の御姿と、研究室で片手を頬に当て、はにかんだように話しはじめられる御姿です。

1980年、博士後期課程に進んだ年に結婚した私は、家内を通してはじめて先生にお目にかかる機会を得ましたが、それからしばらくして、先述の悠揚とした歩き方で文学部に向かって来られる先生に毎週のようにお会いすることがありました。先生が他専攻の一学生にすぎない私にもきさくに声をかけて下さったせいでしょう、何度か挨拶を交わしているうちに何かもう少し具体的なお話しをしたいような気持ちに駆られて、そのうち留学のことでご相談にお伺いしてもよろしいでしょうか、と言ってしまいました。じつは、家内が以前から大学院生のうちに留学するよう強く勧めており、私自身はどちらかと言えば気が進まず迷っていましたが、先生にお会いしたとき、とっさに先程の一言が口をついて出てしまったのです。先生は研究室でマイנטツのこと、DAADのこと、ドイツ語の勉強のこと等を、貴重なお時間を割いて丁寧にご説明下さいました。その後もなお気は進まなかったのですが、先生のご親切に対して、やはり留学は止めますとはとても言い出すことができず、先生にまったくそのようなお積もりはなかったとしても、私は、先生の存在によって押し出されるようにして、それ以降、留学の準備をはじめることになりました。また、留学先を最終的にドイツからイギリスに変更したときにも、先生の愛されるドイツに行かないのは何か申し訳ないような気がしたものです。

翌年、1981年4月から西洋古典学と西洋哲学史の共通の科目として設定された先生の演習、トュキュデイデス『歴史』に、私は留学の年、1983年の夏休み前まで出席する幸いな機会を与えられました。授業では学生は、ギリシア語の音読なしに直ちに日本語に訳すことを求められ、もしも間違いがあれば先生が口を挟まれるだけでしたので、1回の授業で進む量はきわめて多く、手許のテキストに書き記した印によれば、1回当りOCT平均6～7頁の割合で進み、

留学前の1983年6月24日の最後の授業までの2年半で、第4巻59節までを読み終わりました（後から吉武君に聞いたところでは、7年目半ばで全8巻を読み終えたとのこと）。演説部分では多少減速しましたが、振り返って見て驚いたことに、ペリクレスの戦死者追悼演説（第2巻35～46節）は、1981年11月27日の授業で一気に最初から最後まで、OCT 7頁以上を読み通しています。先生は、学生の翻訳をチェックする合間合間に、Gommeはこう書いていると言って、重要と思われる論点を、頬に手を添えつつ簡潔に紹介して下さいましたが、ペリクレスの追悼演説部分だけでも42頁もある充実したGommeの註釈書を毎回きちんと読んでいらっしゃる先生には、ただただ驚くだけでした。先程、先生の存在に押し出されるようにして、留学の準備をいはじめたと言いましたが、この場合も、学生が粗略な準備で出席したのでは、きちんと準備して授業に臨まれる先生に申し訳ないという思いに促され、Gommeの詳細な註のうち、せめて文法的事項だけでも拾い読みしようと不十分な努力をしたことが思い出されます。

ひたすら読み進めていく授業であったため先生の余談はほとんどありませんでしたが、ある時、比較的ゆったりと三段橈船について説明され、最上段の漕ぎ手の仕事はきついためなり手は少なく、また相手の船体に突進する際は進行方向、すなわち背中の方から敵の攻撃に曝されることも起こるところから、非常な勇気が必要とされたはずだ、といった内容のことをおっしゃいました。詳しい説明は忘れてしまいましたが、ただ、先生が三段橈船最上段の漕ぎ手として、弓矢の降り注ぐなかを敵船に向かって船を漕ぎ進めておられる姿が眼前に浮かんでくるように感じられたことが、いまでも鮮やかに記憶に残っています。